

# Republic of Kenya

EARTH GALLERY Vol.131 [ケニア共和国]

地球ギャラリー  
写真文・桜木奈央子 フォトグラフィー

ケニアのナイバシャにあるバラ農園で、バラを摘みながらおしゃべりを楽しむ女性たち。

# アフリカに咲くバラ





5年前から働くキャロライン。二人の女の子の母親だ。



ポーズをきめる男性たち。



アリスは兄の紹介でバラ農園にやってきた。



農園で育つバラの花。



バラの生育の様子をこまめにチェックする。



レーンごとに担当者の名前が記入されていて、それぞれが責任を持ってバラを育てる。



アリスと、3歳になる息子のジョセフ。



出荷作業をする男性。



ケニアの首都ナイロビから車で約1時間のナイバシヤには、いくつもの広大なバラ農園がある。ちょうど乾季から雨季に変わる季節に、その中のひとつのあるバラ農園を訪れた。

ケニアンブルーとも言いたくなるような独特の、透明度の高い青空が広がる。赤道直下で標高が高いナイバシヤには、豊かな自然の中でさまざまな野生動物が棲んでいる。郊外に少し車を走らせると、キリン、シマウマ、インパラ、バッファローなどに出会う。その姿も形も生態も多種多様な動物たちを見ていると、そのままの姿で今ここに存在しているだけでも奇跡なのではないか、という気持ちになる。サバンナの真ん中で生まれたての雲を眺めていると、人間も動物も植物も、この美しい瞬間を共有するためだけに生きていくのかもしれないという思いすら抱く。



バラ農園を訪れるのは2度目だ。3年前に撮影した女性たちは私のことを覚えてくれていて「おかえり!」「久しぶりね!」と声をかけてくれた。

農園を歩いていると、誰かの鼻歌がバラの香りにのっけかすかに聞こえてきた。ラジオから流れる陽気な音楽に体を揺らしながら出荷作業に勤しむ人たちが。抱えきれないほどのバラの花を選びながら、

大きな声で笑い合う女性たち。働くことの喜びが身体中から溢れていた。ケニアでは、女性が外で働いて安定した収入を得られる機会が少ないので、働くことに幸せを感じているのだろう。

バラ農園でひとときわ楽しそうに働くアリスとの出会いはとても印象的だった。「私、日本人の男性と踊ったことがあるのよ」と、得意げな顔をして私に話しかけてきたのだ。

それがきっかけで仲良くなり、アリスは私を自宅に招待してくれた。その道中で彼女が語ってくれたのは、故郷ふるさとの小学校での思い出だった。

「日本人の先生がいて、授業がおもしろかった。彼は、日本の踊りや歌を教えてください、一緒に踊ったことがあるの!」そう言っていて、日本語で「ふるさと」を歌ってくれた。窓の外に広がるケニアの大自然を見ながら聴いたその歌は、私の心に深く響いた。

雨季の始まりを告げる雨が降った肌寒い日だったので、彼女は甘くて熱いチャイを作ってもてなしてくれた。5歳の娘シシリアと3歳の息子ジョセフ、そして優しい夫アイザックの4人家族。家具はベッドとプラスチックのテーブルしかない、けっして裕福な暮らしではない。それでも、幼い子どもたちにはよい教育を

受けさせたいと考えていて、バラ農園の仕事で得たお金で二人を幼稚園に通わせているという。

「次の雨季には、3人目が生まれるの!」アリスはうれしそうに、大きくなったお腹に触れながら教えてくれた。



バラ農園での仕事は朝の8時に始まる。朝、農園のゲート近くにある部屋で赤いユニフォームに着替え、それぞれの持ち場に向かう。お昼の時間になると敷地内にある食堂でランチを食べる。そのあと休憩をはさみ、また夕方まで働く。4時半になるとユニフォームから私服に着替え、5時には帰途につくバラ農園の労働者たち。近隣の村から来ている者もいれば、アリスのように職を求めて遠い町から引越して来た者もいる。彼女たちが楽しそうに働く姿が印象に残った。それは、アフリカに咲くバラのように、力強く美しいと感じた。

桜木奈央子(さくらぎ なおこ)

1977年高知県生まれ、横浜市在住。2001年からアフリカに通信販売、取材を続ける。雑誌や新聞にフォトエッセイや書評を寄稿。小学校から大学まで講演や授業も多数行っている。著書に「世界のともたちケニア大地をかけるアティエノ」(偕成社)、「かぼちゃの下でーウガンダ戦争を生きた子どもたち」(春風社)。



左: ナイバシヤ郊外に生息する野生のキリン。右: サバンナに広がる青空。